



SHIGA UNIVERSITY

国立大学法人 滋賀大学経済学部  
地域連携教育推進室

2019年度

# 活動報告書

---

# 目次

I. はじめに	1
II. 今年度の取組概要	5
1 地域連携教育推進室の運営体制	5
2 プロジェクト科目	6
3 地域共生論	7
4 アイデアコンテスト2019出場	7
5 近江楽座	8
6 シェア金沢訪問ツアー	8
7 SDGsプロジェクト	8
8 プラットフォーム事業	9
9 地域連携教育推進室図書館	9
10 相談業務	10
11 People's Pantry みんなの食品庫プロジェクト	11
12 広報活動	11
III. 各取組の詳細	13
IV. 今年度の取組を振り返って	33



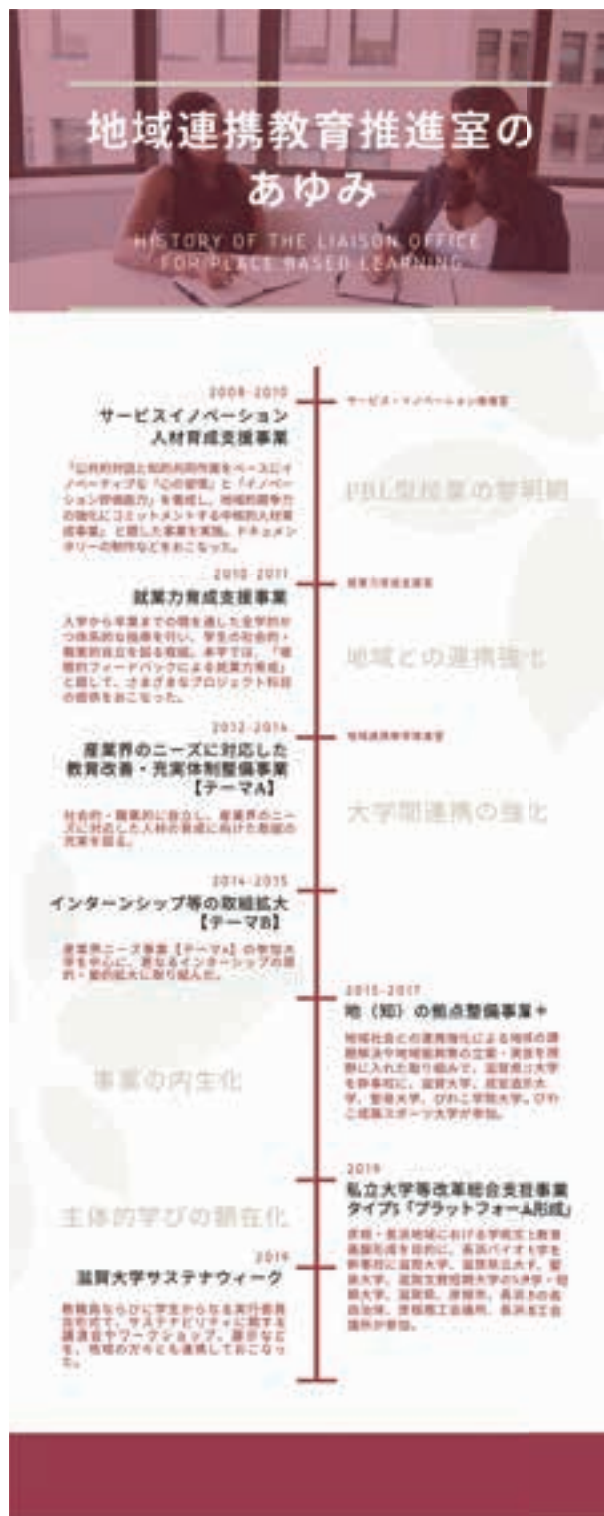
# I はじめに

IoT (Internet of Things) やAI (Artificial Intelligence) の発達にともない、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させ、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会 (Society 5.0) の実現が求められています。

滋賀大学でも2017年に日本初のデータサイエンス学部が設置され、文理融合の教育が推進強化されることになりました。地域連携教育推進室では、学生と地域（フィジカルな現実空間）をつなぐことによって、その基盤を提供しています。具体的には、経済学部やデータサイエンス学部で提供されているサイエンス、技術、エンジニアリング、数学（STEM）の授業に加えて、PBL（Project あるいはPlace Based Learning と呼ばれる）型授業、インターンシップ、ボランティア体験のほか、インフォグラフィックスや映像表現などの芸術（Art）的要素なども学ぶことで、文理融合型のSTEAM教育の完成を目指しています。

そもそも地域連携教育推進室の教育の源流は、2008年に始まったサービス・イノベーション人材育成支援事業（以下、SI事業）にあります。この事業の題目は「公共的な対話と知的共同作業をベースにイノベティブな『心の習慣』と『イノベーション評価能力』を養成し、地域的競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業」と極めて長いものでしたが、改めてこの題目を眺めてみると、現在の地域連携教育推進室の姿と重なるものがあります。日常的に学生が集い、地域の課題などについて対話を重ねながら、地域に出ていく姿はまさにこの長いタイトルそのものなのです。

映像制作を教育ツールとして活用しはじめたのもこのSI事業でした。当時はまだ「経済学部なのになぜ映像制作なのか」という疑問の声もありましたが、取材・構成・編集という一連の作業の中で、課題発見能力、



課題解決能力、プレゼンテーション能力といった社会人基礎力の中核となる力をつけるのに有効でした。

2010年には就業力育成支援事業が始まりました。本学の取り組みは「複眼的フィードバックによる就業力育成」と題されました。PBL型授業や映像制作などの取り組みを継続しながら、学生自身が、自分自身や企業（職業）を複眼的に眺めることによって、客観的かつ主体的な分析を行えるようにするために、学生自らが企業研究を行い、面接官として質問事項などを考え、実際に面接をおこなう「複眼的模擬面接」なども実施しました。

2012年からは、文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【テーマA】(2012-2014年)」の助成を受けて、滋賀・京都・奈良の16大学の連携事業（「滋京奈地区を中心とした地域社会の発展を担う人材育成」事業）に発展をしました。この取組では、地元の企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働連携協議会を設置して、そのもとにインターンシップ、PBL、キャリア形成、産業界連携という4つのテーマ部会を設けて、産業界（社会）のニーズに対応し、社会的・職業的にも自立した人材の育成に向けた教育の充実を図りました。さらに2014年からは、11大学と連携をして、文部科学省「インターンシップ等の取組拡大【テーマB】(2014-2015年)」の助成を受けて、インターンシップの質的・量的拡大に取り組んできました。

地域連携教育推進室は、いわゆる就職活動が解禁になった際に行われる従来型の就職支援ではなく、1回生～2回生の早い時期から卒業にいたるまで継続的に「社会人基礎力」の育成をはかることを目的としています。

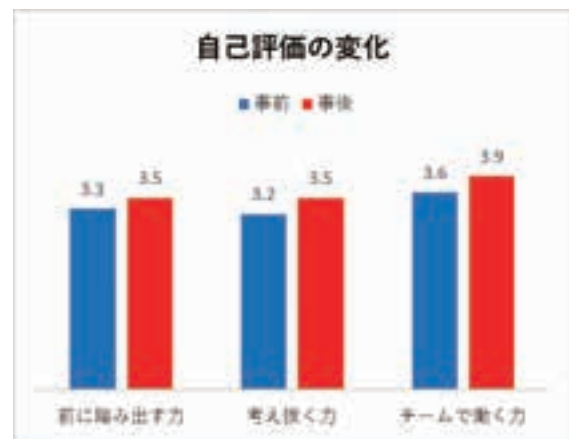
本学の「社会人基礎力」を高めるプログラムは、大きく3つに分けることができます。

① PBL (Project Based Learning) 科目です。従来の大学の講義とは異なり、地域社会やNPOを含む企

業が実際に直面している課題を学生と共有し、地域社会や企業と学生が共同で解決していく活動を通じて「社会人基礎力」を育成する科目です。

② インターンシップです。インターンシップとは、簡単にいうと大学生が社会に出る前の在学中に企業で働く経験をすることです。就職体験を通じて、リアルに近い就業体験の中から「社会人基礎」を育成するプログラムです。

③ ボランティア活動です。本学の学生たちが主体となって、地域社会や企業の課題を発見し、地域の方々と一緒に課題の解決を図るプログラムです。このプログラムは単位が出るわけでもなく、また就職に直結する活動ではありません。学生の自主性が最も問われるのがこのプログラムだと言えます。



本学では、以上の系統に沿った様々なプログラムを地域の自治体や企業、NPOと広く連携し、開発することで学生の「社会人基礎力」向上に取り組んでいます。

学生の「社会人基礎力」を育成していくためには、従来型の大学での講義ももちろん大切ですが、地域連携教育推進室を中心とした実践型・問題解決型で、地域社会に開かれた教育プログラムも大切なのです。

こうした取り組みの成果は、量的にはかることが極めて難しいものですが、ここにひとつのデータがあ

ります。受講生による主観的評価です（上図）。長期実践型インターンシップに参加した学生に事後アンケートをとって見たところ、平均値でみて、「前に踏み出す力」、「チームで働く力」、「社会人基礎力」のいずれも伸びたと感じていることがわかります。また、能力要素別にみると、特に主体性や発信力などにおいて高くなった認識していることがわかりました。

昨今、PBL型講義やインターシップの拡充が全国的に顕著になってきています。その背景には、こうした「成

果」があるのかもしれません。しかし、われわれが強調したいのは、こうした定量的な成果以上に、肌で感じる学生たちの成長なのです。ひとりひとりの学生と顔の見える関係を形成し、学生と共に地域の課題を発見し、解決していく。またプログラムについても意見を交換し、一緒に仕事を作り上げ、達成していく。こうした中で学生の成長を肌で感じるができるのです。

（取組責任者：中野桂）

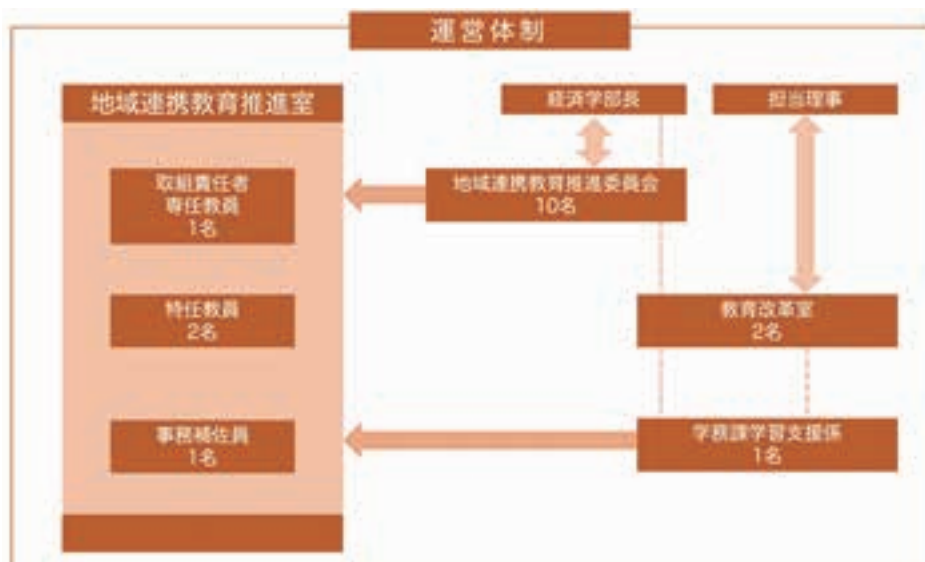


## II 今年度の取組概要

### 1 地域連携教育推進室の運営体制

今年度は、地域連携教育推進室は、特任教員2名（内1名は国際センター所属）、事務補佐員1名および取組責任者である専任教員1名の4名体制で日常業務にあたりました。年度計画の策定や進捗管理については、地域連携教育推進協議会において適宜協議しながら、事業を行っています。

なお、2019年4月には、社会と大学との新しい関係を構築、深化させ、産学公連携を更に積極的に推進するべく、全学組織として「産学公連携推進機構」が新たに設置されました。地域連携教育推進室も、この新たな機構との連携・協力も進めていくことになりました。





## 2 プロジェクト科目

---

### 春学期

よのなか探求プロジェクト2019春

#### 子どもを取り巻く環境から、世の中のことを考える

期 間 2019年4月9日から2019年7月23日

受講生 21名

担当教員 柴田 雅美

#### 世界遺産認定へ向けた彦根ガイド養成プロジェクト

期 間 2019年4月19日から2019年7月12日

受講生 10名

担当教員 中野 桂・柴田 雅美

### 秋学期

#### プロジェクト型インターンシップ2019

期 間 2019年7月15日から2019年11月21日

受講生 25名

担当教員 柴田 雅美

よのなか探求プロジェクト2019秋

#### 市議会議員と地方自治について考えよう

期 間 2019年10月2日から2020年1月15日

受講生 27名

担当教員 柴田 雅美・中野 桂

社会人基礎力向上プロジェクト2019秋

#### 対人支援のプロから学ぶスゴ技！

#### ーコミュニケーション・課題解決・伝え方のスキル

期 間 2019年10月2日から2020年1月15日

受講生 50名

担当教員 柴田 雅美・中野 桂

映像ドキュメント制作プロジェクト2020春休み

#### 地域社会で若者の社会復帰や立ち直りを支える人たち

期 間 2020年2月12日から2020年2月18日

受講生 20名

担当教員 中塚 智子・柴田 雅美

## グローバル・インターンシップ2020春休み

期 間 2020年3月1日から2020年3月21日

受 講 生 1名(予定)

担当教員 田村 あずみ・弘中 史子

## 春・秋学期

### 企業人と語る@彦根商工会議所 2019春・秋

期 間 2019年4月9日から2019年7月23日

期 間 2019年10月1日から2020年1月21日

受 講 生 春23名・秋26名

担当教員 柴田 雅美

SDGsプロジェクト2019春・秋

### 学び・調べる SDGs@滋賀大学 春・秋

期 間 2019年4月11日から2019年7月25日

期 間 2019年10月3日から2020年1月23日

受 講 生 春20名・秋19名

担当教員 柴田 雅美・中塚 智子

### 国際交流ワークショップ・プロジェクト2019春・秋

期 間 2019年4月24日から2019年7月24日

期 間 2019年10月8日から2019年11月26日

受 講 生 春19名・秋21名

担当教員 柴田 雅美・田村 あずみ

## 3 地域共生論

---

期 間 2019年4月11日から2019年7月25日

受 講 生 221名

担当教員 中野 桂・柴田 雅美・近藤 紀章

## 4 アイデアコンテスト 2019 出場

---

開 催 日 2019年9月6日(金)

場 所 彦根ビューホテル

共 催 滋賀中央信用金庫、湖東信用金庫、滋賀県、COC+6大学

## 5 近江楽座

---

### 子どもへのラグビー普及活動 ～一緒にやろうよ！～

期 間 2019年7月から2019年9月

代 表 者 棚橋 理人

指導教員 入江 直樹

実施体制 45名

### 滋賀タンザニアHURUMAプロジェクト

期 間 2019年8月から2020年2月

代 表 者 高須 海地

指導教員 柴田 雅美

実施体制 6名

## 6 シェア金沢訪問ツアー

---

日 時 2020年3月4日

指導教員 中野 桂

場 所 石川県金沢市

人 数 20名（予定）

## 7 SDGs プロジェクト

---

### SDGs講演会

#### ポートランドのまちづくり～City Repairの活動

開 催 日 2019年9月2日（火）

講 師 Matt Bibeau（マット・ビバウ）氏

受 講 生 20名

### びわ湖環境ビジネスメッセ2019出展

期 間 2019年10月16日～10月18日（3日間）

発 表 者 3組（6名）

指導教員 中野 桂・柴田 雅美

### 滋賀大学サステナウィーク2019

期 間 2019年11月25日～11月29日（5日間）

主 催 滋賀大学サステナウィーク実行委員会

場 所 滋賀大学彦根キャンパス

## 8 プラットフォーム事業

### 認知症をめぐる共生社会構築のためのプロジェクト

期 間 2019年8月12日から2020年3月31日

担当教員 中野 桂

講 演 会 「認知症とともに生きるために」キックオフセミナー

開 催 日 2019年9月27日（金）

講 師 須藤 シンジ氏 ピープルデザイン代表  
仁木 一順氏 大阪大学実践薬学研究センター  
中野 桂氏 滋賀大学経済学部教授

受 講 生 24名

### 不登校プロジェクト

期 間 2019年8月19日から2020年3月31日

担当教員 柴田 雅美

講 演 会 「これからの教育を考える デモクラティックスクールという選択」

開 催 日 2020年3月7日（土）

講 師 今井 恭子氏 デモクラテックスクールまんじぇ代表

## 9 地域連携教育推進室図書館

地域連携教育推進室では、学生への情報提供の場づくりの一環として、地域連携教育推進関係の書籍・DVDの蔵書を充実し、学生への書籍類の貸出を行っています。蔵書数は1403冊、今年度の貸出冊数は延べ35冊です。

（2020年1月8日現在）

働き方や生き方に関する書籍はもちろん、差別、格差、貧困、環境問題など社会問題に関わる書籍やデザインやイノベーションに関わる書籍を置くことによって、関心領域を広げながら、やりたいことを見つけ出してもらうようにしています。

また、プロジェクト科目に関連する書籍も揃え、学生がより授業の理解を深められるようにしています。



## 10 相談業務

---

地域連携教育推進室の日常業務では、学生生活や勉強、進路に関する相談も多くありました。

地域共生論や各プロジェクト科目を通じて学生の認知は高まり、地域連携教育推進室に来る学生が増えています。担当教員としては、プログラムの開発・実施に加え、学生に向き合うことが大きな業務と考え、相談には時間をかけ、考え方の指針やサポートになる書籍や学外活動の紹介を行いました。

大学において学生が人間関係を築く機会として部活やサークル、ゼミがありますが、これに加え推進室で行うプロジェクト科目や推進室が、第3の機会として活用され始めたとも言えます。部活・ゼミ等に関係なく1年生から4年生が学年横断的に交流をもち、学生の主体的活動へと発展しています。例えば、学生ら自主的に地域に関わるグループを結成し、滋賀大学の近江楽座としてJCMU交流イベントを開催したりしています。また大学関連以外でも、地域のNPOやボランティアグループが運営する子ども支援活動に参加したりなど、自ら考え行動する学生が増えています。



## 11 People's Pantry みんなの食品庫プロジェクト

今年度の滋賀大学ウィークフォーサステナビリティ2019の取り組みの一つとして、食品ロスの削減を目的に「People's Pantry みんなの食品庫」プロジェクトをスタートし、地域連携教育推進室に「食品庫」を設けました。「People's Pantry みんなの食品庫」とは、家庭等で余剰になった食品を必要とする人へ届ける仕組みです。フードロスに関心を広げ、ロス削減への具体的なアクションになるとともに、食材を必要とする人の健康と福祉の向上に寄与するキャンパスSDGsとして定着することを目指しています。



学内の教職員・学生に余剰食材の寄付を募り、集まった食材は学内で必要とする方（教職員・学生）に提供します。量が多い場合はフードバンク彦根に提供したり、学内チャリティーバザーを実施し、収益金は彦根市社会福祉協議会への寄付も想定しています。

開設期間 2019年11月25日（月）から3月末実施。2020年度も継続予定。

寄付受付・提供日 原則として月曜日～金曜日 10時から16時

寄付・提供対象者 本学教職員、学生

今年度（4ヶ月）の実績 寄付人数 延15人、寄付食品数 64個、さつまいも・かぼちゃ多数  
譲渡人数 延64人

## 12 広報活動

地域連携教育推進室では、主に①チラシ、②Facebookページ、③メールマガジン、④キャンパス教育支援システム（SUCCESS）などを利用して、学生や関係者に対してプロジェクト科目やイベントなどの広報を行っています。

チラシは、概ねスタッフの手作りではありますが、毎回趣向をこらしたものを作成しています。

Facebookページでは、イベントページをつくって講演会などの案内を行なっています。

メールマガジンは、2011年5月から発行を開始し、これまでの発行回数は193回、登録人数は237名に達しています（2020年2月1日現在）。しかしながら、新規登録の購読者は減っており、LINEなどの活用の検討も始めました。



## Ⅲ 各取組の詳細

- ① よのなか探求プロジェクト 2019春  
子どもを取り巻く環境から、世の中のことを考える . . . . . 14
- ② 世界遺産認定に向けた彦根ガイド養成プロジェクト . . . . . 15
- ③ プロジェクト型インターンシップ2019 . . . . . 16
- ④ よのなか探求プロジェクト 2019春  
市議会議員と地方自治について考えよう . . . . . 17
- ⑤ 社会人基礎力向上プロジェクト 2019秋  
対人支援のプロから学ぶスゴ技！  
ーコミュニケーション・課題解決・伝え方のスキル . . . . . 18
- ⑥ 映像ドキュメント制作プロジェクト 2020春休み  
地域社会で若者の社会復帰や立ち直りを支える人たち . . . . . 19
- ⑦ グローバル・インターンシップ 2020春休み . . . . . 20
- ⑧ 企業人と語る@彦根商工会議所 2019春・秋 . . . . . 21
- ⑨ SDGsプロジェクト 2019春・秋  
学び・調べる SDGs@滋賀大学 . . . . . 22
- ⑩ 国際交流ワークショップ・プロジェクト 2019春・秋 . . . . . 23
- ⑪ 地域共生論 . . . . . 24
- ⑫ 子どもへのラグビー普及活動 ～一緒にやろうよ！～ . . . . . 25
- ⑬ 滋賀タンザニアHURUMAプロジェクト . . . . . 26
- ⑭ シェア金沢訪問ツアー . . . . . 27
- ⑮ SDGs講演会 . . . . . 28
- ⑯ びわ湖環境ビジネスメッセ 2019 . . . . . 29
- ⑰ 滋賀大学サステナウィーク 2019 . . . . . 30
- ⑱ 認知症をめぐる共生社会構築のためのプロジェクト . . . . . 31
- ⑲ 不登校プロジェクト . . . . . 32



# 1

## よのなか探求プロジェクト2019春 子どもを取り巻く環境から、 世の中のことを考える

期 間 2019年4月9日-2019年7月23日

受講生 21名

担当教員 柴田 雅美

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目は家庭環境やコミュニケーションなどに困難を抱える子どもたちの教育支援の現場を通じて、自らの働き方・社会との関係性の作り方を学ぶプログラムとして開講しました。このプロジェクト科目のねらいは、福祉や教育という複眼的視点の体得、身近に存在する社会的課題への理解、教える経験を通じた主体性やコミュニケーション能力の育成、多様な社会人との交流による複眼的思考の体得です。

授業は1年生から4年生の21名の履修があり、私立彦根総合高等学校や市内中学校、地域の学習支援教室を運営しているNPO法人Linksとも連携した実習活動を中心に行いました。座学として福祉的視点の体得を目的にポイントテーク（障がいのある生徒の代わりに講義概要をまとめるノート作成術）を学んだり、彦根市少年センターあすくる彦根の疋田房代さんを講師に、あすくるの活動を通じた子どもの状況も学びました。

実習では彦根総合高校の放課後学習会や土曜日に市内中学校で開催されている土曜教室でみる、夜間の公民館で開設されている学び育ち教室Learning Linksで小中高校生の学習支援や交流支援に関わりました。実習現場で出会う子どもたちのなかには、閉じこもり気味やこだわりが強いなどの特性を持つ子どもたちが多く、テスト対策や受験指導ではなく、子どもたちの社会性の発達を狙いとした支援も体験しました。

経済学部で学ぶ大学生にとって、福祉のことを学んだり、子どもたちを取り巻く様々な課題を自分ごととして理解する機会はなかなかありません。学生のエッ

セイをみると、「社会が障がいや問題のある児童を受け入れられていない。児童の可能性、価値を探し、価値ある財としていくことが大切だ」とか、「いわゆる主要5教科ではないことへの評価が大切。その才能を見つかけられるように子どもが様々なことを体験できる環境を作ることが大事」など、このプロジェクトをきっかけに世の中のことを考える機会になったことがうかがえました。



土曜教室でみるでの実習風景



ブライトクラスでの実習風景

# 2

## 世界遺産認定へ向けた 彦根ガイド養成プロジェクト

期 間 2019年4月19日-2019年7月12日

受 講 生 10名

担当教員 中野 桂、柴田 雅美

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目は、地域実践型PBL学習を通じた地域理解と複眼的思考の体得、社会人基礎力の向上、専門的知識の活用を目的としたプロジェクト科目であると同時に、「世界遺産学」の講義と連動し、世界遺産認定を念頭に置いた彦根ガイドの養成もねらいとして開講しました。彦根市文化財課や彦根ボランティアガイド協会の協力により、彦根城とその周辺についてのレクチャーを受け、学生オリジナルの観光コースを作成し、実際に「世界遺産学」の履修学生を対象にガイドを行いました。履修学生は9名でした。

授業では、彦根市文化財課の鈴木達也氏から「世界遺産の観点から見た彦根の観光資源」について学び、彦根ボランティアガイド協会のガイドさんから、既存のガイドコースや見学ポイントの洗い出しを行ったのち、学生それぞれがマイガイドコースの検討をしました。さらに、それぞれが作成したツアーをもとに、実際にボランティアガイドさんの指導を受けながら模擬ツアーを行い、ガイドとしてスキルアップのためのポイントやガイド時の注意点について学び、本番に備えました。

本番のガイドツアーでは、それぞれのグループが6、7人の参加者を案内しました。事前に準備した資料をもとに、参加者に伝わるように案内をするのはとても苦労したようですが、ボランティアガイドさんに助けをもらいながら、無事全てのツアーを終えることができました。

参加者からは「パンフレットに書かれていないところの説明が多く、お城上級者向きでした。掘り下げていけば良いコースになる」、「他県出身の学生さんが下調べをし

て詳しく説明してもらったことはとても意義がある」などの感想をいただきました。履修者からは「はじめは不安でしたが、参加者のみなさんが興味を持ってきていただき、安心した」「広く浅くの知識も必要だった」「やりきった感はずいぶん、もっとうまくやれたかもしれない」「友達や家族が彦根に来たときに、ガイドをしておもしろいところに連れて行ってみたい」などの感想がありました。

参加者からの感想にもあるように、他県出身の学生が彦根城やまちのことに興味を持ち、自分で調べることは大事なことであり、その学生の姿を見ていると、興味の深まりやモチベーションのアップを間近で感じることができるものでした。世界遺産の認定に向けて一足飛びの効果はありませんが、彦根のことを語る大学生が増えることは、彦根のまちについての口コミを増やしていくことになるし、大学生も自分のまちとして、アイデンティティの一つになるのではないのでしょうか。



ボランティアガイドさんからツアーを学ぶ



学生ガイドツアーの様子

# 3

## プロジェクト型インターンシップ 2019

期 間 2019年7月15日-2019年11月21日

受 講 生 25名

担当教員 柴田 雅美

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目は、学生の長期休暇に、企業や地域団体の課題にしっかりと関わって課題解決を目指す取り組みです。この夏季プログラムでは、彦根商工会議所青年部のHikone Work Academyプロジェクトと連携し、市内企業16社に23人の学生が履修し15日以上活動を行いました。(1年13名、2年7名、3年2名、4年1名)

プログラムのねらいは、企業の実際の課題(テーマ)への取り組みを通じて、経営者・社員の方の姿から働くことについて学び、将来の進路選択に活かすこと、プロジェクトの成果を意識し、学生・企業ともに利点のある活動とすること、その結果として主体性・コミュニケーション力・粘り強さなどの能力を磨くことです。

学生は1社に1、2名のグループで1企業のプロジェクトに取り組みます。受け入れ企業の方に来学いただき会社紹介のプレゼンを聞いた後にマッチングを行いました。事前学習会を経て、このプロジェクトで意識してほしい社会人基礎力についての説明と目標設定を行いました。インターンシップ活動の本番は8月中旬から9月末です。学生らは受け入れ企業さんと進め方や具体的な目標を確認し、それぞれが主体的に活動を行いました。11月21日には受け入れ企業の方にも参加していただき、成果発表会を行いました。

企業が準備したインターンシッププログラムをただ単に行うのではなく、正解のない課題解決にチャレンジするこの取り組みでは、ニーズ把握や仮説検証を繰り返し行い、自ら答えを作り出す必要があります。成

果報告の内容や堂々とプレゼンテーションする姿から、学生らは異世代とのコミュニケーション能力や粘り強く考え行動する能力が大いに鍛えられたと感じます。



企業と学生のマッチング会の様子



成果報告会でプレゼンテーション

# 4

## よのなか探求プロジェクト2018春 市議会議員と地方自治について 考えよう

期 間 2019年10月2日-2020年1月15日

受 講 生 27名

担当教員 柴田 雅美

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目は、彦根市議会と経済学部の連携協定のもと、地方自治や選挙についての講義、市議会議員や議会事務局による講義、市議会傍聴、議会報告会への参加を通じて、地方政治について考え、理解を深めるとともに、自らのライフデザインを考えるきっかけを提供することを目指しました。地方自治に関心のある1年生から4年生の27名が履修しました。

授業では、中野桂先生から「民主主義とは」をテーマに講義を受け、また市議会事務局から議会と事務局の仕事についても講義をしていただきました。また、市議会議員8名をゲスト講師として招聘し、議員になった経緯や今取り組んでいることなどをテーマにグループディスカッションも行いました。彦根市議会12月議会への傍聴も行い、現場の緊張感も味わいました。さらに、彦根市議会の広報誌を題材に、市議会議員のみなさんとディスカッションも行い、大学生の視点から提案を行いました。これらの取り組みを通じて地方自治や政治家という仕事を身近に感じるとともに、その重要性を理解することができました。

今回のプログラムは知識を学ぶだけでなく、大学生自らがファシリテーションの手法を身につけることも目標の一つにしていました。講義としてファシリテーションについて理解を深めながら、実際に学生同士のグループワークを通じてファシリテーションスキルを磨きました。その上で、1月13日の議会報告会・カタリバでは、「小・中学生の学力向上」をテーマにしたワークショップ全体のファシリテーションと各グループの

ファシリテーションの両方を、大学生が行うことができました。今後も彦根市議会との連携協定を活かし、取り組みを継続していきたいと思います。



市議会議員さんとディスカッション



議会報告会

「カタリバ」でファシリテーションを実践

# 5

## 社会人基礎力向上プロジェクト2019秋 対人支援のプロから学ぶスゴ技！ ーコミュニケーション・課題解決・ 伝え方のスキル

期 間 2019年10月2日-2020年1月15日

受 講 生 50名

担当教員 柴田 雅美、中野 桂

### ■ 活動報告

本プロジェクト科目は地域実践型PBL学習を通じた地域理解と複眼的思考の体得、社会人基礎力の向上を目的に、湖東地域障害者自立支援協議会との連携により福祉のプロフェッショナルによる対人スキル指導と施設見学を行いました。

授業は1年から4年生の51名が履修し、毎回の授業では湖東地域障害者自立支援協議会から講師に来ていただき、対人スキル、課題解決思考、伝え方のスキル、ファシリテーションのスキルのそれぞれをグループワークを交えながら教えていただきました。また、施設見学では4グループに分かれて、就労移行支援事業所のjob leadさん、就労継続支援B型事業所のHEARTWORK結さんを見学させていただきました。

普段の大学での学びや学生生活では福祉を身近に感じていない中で、福祉業界の理解を前面に押し出すのではなく、福祉の専門家の持つ様々なスキルを学ぶという構成にすることで、福祉業界への距離を縮めてもらえたのではないかと思います。

授業後半では、障害者施設の事件や障害者のスピーチ動画を見て考え、障害を正面から考える時間もありました。学生らはスキルを学ぶ時とは全く異なり、重々しい表情をしながら、障害を自分ごととして捉え始めていたことが印象に残りました。

今年はいじめて取り組みました湖東地域障害者自立支援協議会との連携プログラムですが、ふりかえりをした上で、来年度にも取り組みを継続していきたいと考えています。



ペーパータワーを競う



スキルを使ってグループワークを実践

# 6

## 映像ドキュメント制作プロジェクト2020春休み 地域社会で若者の社会復帰や 立ち直りを支える人たち

期 間 2020年2月12日-2020年2月18日

受 講 生 20名

担当教員 中塚 智子、柴田 雅美

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目は、ドキュメント映像を制作する授業です。デジタルビデオカメラなどを使用し、撮影と映像編集の基礎、撮影計画の立案等、著作権や映像倫理を学びます。映像制作指導は中塚智子非常勤講師を中心に行います。

今回のテーマは「若者の社会復帰や立ち直りを支える人たち」です。法務省大津保護観察所の協力で更生保護に関わる団体や企業を取材し、更生保護への理解を深めるとともに、2020年度の「社会を明るくする運動」での啓発に活用できる短編映像の制作を目指します。



# 7

## グローバル・インターンシップ 2020春休み

期 間 2020年3月1日-2020年3月21日

受講生 1名 (予定)

担当教員 田村 あずみ、弘中 史子

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目では、春休み中の3月1日から21日までの3週間、アメリカ・シアトルに滞在して、セミナーや現地視察、インターン実習を通してリーダーシップについて学びます。プログラムは米国NPO法人iLEAPが運営し、英語で行われます。本学から1年生1名が参加し、他大学からの参加者とともに研修に励みます。

プログラムは平日朝から夕方まであり、リーダーシップとは何かを考えるセミナー、社会活動をする企業やNPOの現場視察、インターン実習を通じたグループプロジェクト、自己理解を深めるリフレクションなどに分かれています。

シアトルはソーシャルビジネスやNPO活動が活発な土地です。現場視察では、ゲイツ財団や、ホームレス・失業者にレストランでの就業訓練の機会を提供する団体などを訪問する予定です。また社会貢献を行うNPO団体などでインターンを行い、課題解決や提言を行うグループワークにも取り組み、最後に発表を行います。

滞在中、学生はアメリカ人の家庭にホームステイをするので、現地の生活習慣や文化に触れる貴重な機会にもなります。



昨年のプレゼンテーションの様子

# 8

## 企業人と語る @彦根商工会議所 2019春・秋

期 間 2019年4月9日-2019年7月23日  
2019年10月1日-2020年1月21日

受 講 生 春23名・秋26名

担当教員 柴田 雅美

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目は、地域実践型PBLの授業の一つとして、彦根商工会議所と連携したプログラムです。地域経済の振興を担う商工会議所のミッションや業務について理解し、企業経営者から創業や事業継承時の思い、事業の楽しさや苦しさ、展望などの学びを通じて、大学での専門教育への意識づけや自身のライフデザインを考えるきっかけになることを期待して開講しました。

履修学生は春学期が1年生から4年生の23名、秋学期が1年生から4年生の26名です。彦根商工会議所の1Fに設けられたディスカッションスペースに、毎回4社程度の企業に来て頂いて、小グループのディスカッションを春学期、秋学期ともに5回ずつ行いました。

春学期の授業は、企業人と語るトークテーマを設け、「企業の地域貢献」「AI・ロボット活用実践」「企業のグローバル展開」「起業家精神・アントレプレナーシップ」「ダイバーシティの取り組み」の5つのテーマでお話しを聞き、ディスカッションをさせていただきました。

秋学期の授業は企業人とのディスカッションを企業見学を行い、全体としてメモを取ることにフォーカスしました。具体的には、まず企業人と語る回で、気になる点・心が動いた点をメモする。翌週の授業でメモをもとに「なぜ気になったのか、なぜ心が動いたのか」を考え、自分のなかにあるこだわりや考え方を探ったのち、自分の行動に落とし込むまでを個人ワークとして行います。その後、学生同士のグループワークで自分の考えの発信と他者の考えの受信をする。発信と受信を繰り返すことで考えを深める。企業人からの学びだけを目的にするのではなく、

手段として自身を深く掘り下げることをねらいました。

授業を終えて、経営者の視点を学んだ者、お金という価値の生み出し方を学んだ者、将来の働き方を考えることができた者、学生同士の視点の違いを学んだ者など、学生一人ひとりがそれぞれに自分への落とし込みをしており、非常に満足度の高いものになりました。

今回の取り組みは、連携先の彦根商工会議所の協力で企業経営者らとのディスカッションに加え、2社の企業見学を行うことができ、非常に充実したものとなりました。ありがとうございました。



企業人とディスカッション



学びを深め、プレゼンテーション



# 9

## SDGsプロジェクト2019春・秋 学び・調べる SDGs @滋賀大学

期 間 2019年4月11日-2019年7月25日  
2019年10月3日-2020年1月23日

受講生 春20名・秋19名

担当教員 柴田 雅美、中塚 智子

### ■ 活動報告

本プロジェクト科目は、学生がSDGsの基礎を学び、考え方を体得した上で学内の取り組みを取材し、記事を作成するプログラムで、昨年度に続いて取り組みました。この取り組みを通じて、大学での専門的な学びや学生活動とSDGsの17のゴールとの関連性を認識し、持続可能な発展や開発を自分の身近なことから捉える機会にすることをねらいとしました。また、学生の取材記事をアーカイブし、大学の広報等で使えるSDGs資料集として完成を目指すものです。

授業では、まず学生のSDGs理解を深めることを目的に、JICA 関西の国際教育推進員の山本康夫氏を講師に迎え、SDGsワークショップを開催しました。SDGsの基礎を学び、ワークとして身近な社会課題とSDGsのつながりや1つのSDGsのゴールが多様に関わりあっていることを認識しました。

続いて取材や写真撮影のノウハウについて指導を受けたのち、大学のSDGs的な活動について候補を選出しました。取材先候補の担当を決め、アポ取りと取材を行い、記事を作成しました。

今回取材させていただいた先生やゼミ活動等の取り組みは、春・秋学期をあわせて35事例です。教員の研究事例、事務部門のゴミ処理、エネルギー、古本活用の取り組み、学生グループの活動など幅広い内容の資料を作成することができました。

資料は、びわ湖環境ビジネスメッセの滋賀大学ブースで掲示し、大学のSDGsへの取り組みの紹介に活用したり、滋賀大学ウィークフォーサステナビリティで

もポスター掲示をするなど、学内での啓発にも活用していただきました。また、滋賀大学におけるSDGsに関する取り組みとして、ウェブに掲載される予定です。



SDGsワークショップの様子



完成したSDGs資料

# 10

## 国際交流ワークショップ・プロジェクト 2019春・秋

期 間 2019年4月24日-2019年7月24日  
2019年10月8日-2019年11月26日

受講生 春19名・秋21名

担当教員 柴田 雅美、田村 あずみ

### ■ 活動報告

このプロジェクト科目では、日本人学生と留学生がワークショップを通じて、お互いの交流を重ねて理解を深める機会を作ることを目的に実施し、春学期25名（履修学生19名、聴講学生6名）、秋学期は22名（履修学生21名、聴講学生1名）で開講しました。日本人学生と留学生の交流に加えて、春学期はディーキン大学生やリーズトリニティ大学生との交流を、秋学期はミシガン州立大学連合日本センターへの留学生との交流をそれぞれ組み入れました。

春学期は日本人学生16人と留学生9人で、アタック25という全員自己紹介ゲームからスタートし、お互いの関わり度合いを高めるグループワークを何度か行いました。本学に研修に来ているオーストラリアのディーキン大学の大学生との交流では、英語を使ったグループワークとして彦根の伝統ゲーム・カロムやボードゲームを行いました。さらに、授業の後半では、イギリスのリーズトリニティ大学からの研修生とともに、彦根城の屋形船に乗船し、彦根城の歴史について学ぶとともに英語によるコミュニケーションの向上も図りました。

秋学期は日本人学生12名と留学生10名で行い、恒例の自己紹介ゲームから始まり、インプロビゼーションを使ったコミュニケーションワークとして、即興演劇を演じることでお互いの距離を縮めることができました。また、彦根に所在するミシガン州立大学連合日本センターへの留学生との交流として、ハロウィンパーティーとサンクスギビングパーティーへの参画を行いました。10月末に開催されたハロウィンパーティーではアメリカ仕込みの本格的な仮装に圧倒されながらも交流を楽しみ、11月に開催され

たサンクスギビングパーティーでは、本学学生が考案したメニューとレシピでミシガン留学生と一緒に料理を作り、食べるという交流の機会になりました。

このプロジェクトを通じて日本人学生と留学生の距離は確実に縮まりましたし、またミシガン州立大学連合日本センターという地域の施設とも連携をとることで、さらに幅広い国際交流の機会が創出できたと思います。交流を継続していくことが多様性の理解に繋がり、将来にグローバル人材として活躍できるベースになると期待しています。

一方、授業期間の設定に課題がありました。春学期は学期全体にわたり9コマを分散しました(2週間に一回)が、特に留学生や聴講生(大学院生)は試験期間間近になると試験準備をするために欠席が相次ぐということになりました。また、ミシガン州立大学連合日本センターとの連携では、先方の授業スケジュールも考慮し、授業時間外での開催をする必要があり、本学学生が参加しづらいということもありました。

しかし全体として今学期の成果を考えると、本プロジェクトは学生のグローバル人材への足掛かりの一つとして意味があると考えられ、2020年度においても継続的な実施を検討したいと考えています。



# 11

## 地域共生論

期 間 2019年4月11日-2019年7月25日

受 講 生 221名

担当教員 中野 桂、柴田 雅美、近藤 紀章

### ■ 活動報告

教養教育科目として春学期に開講しました。本授業では地域の経済活動と市民活動に力点を置いて実施し、理論と実践を学んでいくことで、滋賀大学経済学部が立地する彦根市や長浜市、ひいては滋賀県という地域の価値について学ぶと共に、これらの地域が今後いかにあるべきかについて考えることをねらいとしました。オムニバス形式の15回の講義で、地域の経済活動は中野桂先生を中心に経済学部の先生に担当いただき、市民活動は柴田雅美を中心に、卒業生で彦根市の地域おこし協力隊らを招き、講義をしていただきました。

成果の一つとして、オムニバス講義であるため一つの授業科目で多くの教員の研究を広く知ることができたことがあげられます。このことは、初年時の学生にとっては本学における学びの幅を広め、自分の興味からより専門的な学びへと繋げられる機会となりました。また学業以外の成果では、地域共生論を通じて大学の外への関心が高まり、地域課題に触れる機会も増えたことで、地域のボランティアグループに参加したり、自ら地域でプロジェクトを立ち上げたりする姿が見られるようになってきました。具体的には、ご当地キャラ博への地域イベントボランティアや、フードバンクや子ども食堂、学習支援での地域活動に参加する学生が多く見られるようになりました。

授業を通じた学生の意見を紹介します。

- ・結局なにかを変えるには自分が変わらないといけなし、人を思いやることが地域共生に繋がるんだなっですごく感じました。
- ・自分が今まで地域の一員として活動したことは今ま

で一度もなくその活動の内容すらも知らなかったが、地域共生論を履修することによって、自分が地域活動に参加することに対する意義や、その活動がその地域にどのような形で貢献され、どういかにされるのかさまざまな例を用いて学ぶことができた。

・人が視野を広げて縦だけでなく、横にも成長しなければならぬことはわかっていたが、社会もそうだと考えたことがなかった。誰もがつまらない人間になりたくないように、つまらない社会を作り上げてはならないと思った。

・4月から今日までいろんな方々のお話を聞いてきて思ったことは、地域共生論といっても取り組んでいることや考えていることは人それぞれ違っていたりすることがあるということです。しかし、結果としてそれが地域にどういった良い影響を与えているのか、そこはどの方々のお話を聞いてもほとんど変わらない部分でした。自分自身が、今まさにこの瞬間から地域のために何か取り組み良い影響を与えるということは難しいかもしれません。しかしながら、そう考えて少しでも行動に移せばいつかはその地域に良い影響を与えているかもしれません。いろんな企業でもだんだんと考え取り組まれているSDGsも、それに似たようなものが普段の日常生活において出来ることがあると思います。そういったものから始めていきたいと思いました。

これらは多くの感想の一部ですが、履修により「地域と自分」について深く考える機会になったことは間違いありません。これからの学生の成長と活躍が楽しみです。

# 12

近江楽座

## 子どもへのラグビー普及活動 ～一緒にやろうよ！～

期 間 2019年7月-2019年9月

代 表 者 棚橋 理人

実施体制 45名

指導教員 入江 直樹

### ■ 活動報告

滋賀県彦根市に拠点を置くラグビースクール「ワイルドパンチ」(以下、ワイルドパンチ)と本学体育会ラグビー部との協同プロジェクトとして実施しました。

このワイルドパンチは米原ラグビースクールを母体として小学校高学年から中学生を対象としたラグビースクールで、ラグビーの知識、技術の習得と基礎体力の向上に加え、応援される人間、周りに感動を与えられる人間、感謝する気持ち、ルールを守り地域社会へ貢献する人、の育成に力を入れている組織です。特に中学校の部活動時間の削減によって子供たちが体を動かす、地域の人たちと触れ合うことなどの機会を失ってしまうことを防ぐために立ち上げられた組織です。

7月17日から9月25にまで8回にわたり子供たちと一緒に本学ラグビー部員が同じ練習メニューを通して共に体を動かし、触れ合うことでラグビーの楽しさを改めて実感することができました。また学生は基本的なプレーを繰り返すことで基本プレーの重要性を再認識することができました。更に彦根におけるラグビーの普及促進の重要性を感じる事ができました。

このような活動を単発で終わらせることなく、部員一人一人が常に地域における役割を意識しながら過ごすことの意義を感じることができたと思います。

#### 参加人数

本学体育会ラグビー部員10人、ワイルドパンチ選手10人、指導者5名、合計25名



# 13

## 近江楽座 滋賀タンザニアHURUMA プロジェクト

期 間 2019年8月-2020年2月

代 表 者 高須 海地

実施体制 6名

指導教員 柴田 雅美

### ■ 活動報告

2019年度の近江楽座の活動として、タンザニアの文化を滋賀県内の人々に紹介し、異文化理解をつうじて地元への理解を深めるべく、滋賀大学でのタンザニア紹介イベント「アフリカデー」の開催、アフリカボックスの制作及びアフリカ文化の普及活動を行う「アフリカプロジェクト」を実施しました。

タンザニアを訪問した経験がある学生が、現地で見聞した知見をもとに準備を行い、滋賀大学サステナウィーク2019の一環としてアフリカデーを開催しました。

11月27日のアフリカデー本番では、まず、タンザニア大使館のカンボナ臨時代理大使による講演会を開催しました。大使からはタンザニアの基本情報、タンザニアにおけるSDGsの取り組みを伺いました。続いて、学生がタンザニアで見た「陸の豊かさ」と、「教育の質」についての発表をしました。陸の豊かさの発表の時は、サファリで見た雄大な自然を動画にして参加者に見ていただきました。そして、質の高い教育とは、教育と幸せの関係などについて、学生同士で話して、何人かの学生にそれらの間に対する答えを発表してもらいました。

グループディスカッション後の各チームの発表では、学生が考えた今あるべき教育の姿などを時には熱く語っていただきました。講演会の後、何人かの学生からは、「とても良かった」や、「大切なことを気付かせてくれてありがとう」などという言葉が聞かれました。

また、カンボナ臨時大使代理を交えてタンザニア料理のランチ会を行いました。

アフリカの異文化紹介を行うアフリカボックスプロ

ジェクトは、12月から準備を進め3月から実施する予定で、彦根の小学校や中学校、高校で行う計画をしています。

これらの取り組みをとおして、アフリカの文化に触れ、地元のことや、教育と幸せとの関わり、これからの教育のあるべき姿について理解を深めることができました。

参加人数（アフリカデーのみ）

本学学生49人、一般6人 合計55名



# 14

## シェア金沢訪問ツアー 「佛子園の取り組みを学ぶIN石川」

日 時 2020年3月4日  
指導教員 中野 桂  
場 所 石川県金沢市広坂  
内 容 先進的な高齢者介護施設を学ぶ  
人 数 20名 (予定)

### ■ 活動報告

石川県金沢市の約1万坪の敷地に、サービス付き高齢者住宅、障がい児施設、アトリエ付き学生向け住宅のほか、天然温泉やスポーツグラウンド、キッチンスタジオまでもが立ち並ぶユニークなコミュニティ「シェア金沢」を訪問します。

滋賀県にも「あいとうふくしモール」という同様の施設がありますが、これまで「高齢者」「障がい者」というように縦割りに行われていた福祉を、さらに環境保護や農業振興などとも結びつけて、相乗効果をあげる取り組みが全国的に進んできています。

今回訪問予定のシェア金沢は、アトリエ付き学生向け住宅があったり、全天候型グラウンドなどもあり、世代間の交流を促す仕掛けが多くあります。今回のツアーでは、先進地域を視察することで、様々なヒントを得てきたいと思います。

予定では、8時に彦根を出発し、11時ごろにはシェア金沢に到着。諸々の施設を見学した上で、最後に金沢21世紀美術館も訪問して、20時ごろには彦根に戻る予定です。



15

SDGsプロジェクト

## SDGs講演会 「ポートランドのまちづくり ～City Repairの活動」

開催日 2019年9月2日(火)

講師 Matt Bibeau (マット・ビボウ) 氏

受講生 20名



### ■ 活動報告

ポートランドにあるNPOシティリペアのコアメンバーであるマット・ビボウさんをお招きして、ポートランドのまちづくり (City Repair) のお話をうかがいました。

NPOシティリペアとは、サステナブルな共生社会を作るために、公共空間をクリエイティブな方法で住民の手に取り戻す活動を行なっている団体です。コミュニティのつながりや、コミュニティと自然のつながりを大切にして、芸術的でエコロジカルな場所づくりを行なっているのが特徴的です。

マットさんのお話は、ポートランドの街がいかにしてアメリカでも屈指の住みやすい街になったかというお話でした。

キーワードになったのが、自然と住民の繋がり、住民と住民のつながりです。例えば、1960年代のポートランドは近代化・工業化の波の中で、他の多くのアメリカの都市と同じように、高いビルや高速道路に囲まれた街でした。そこでは、住民と自然、住民と住民のつながりが希薄になってきていました。

そうした中で、住民運動によって、市内中心部にパイオニア・コート・スクエアという市民が集える広場を作ったり、すでに出来ていた高速道路を付け替えて市の中心部に流れるウィラメット川に市民のための公園を作ったりしました。

住宅街でも、交差点に住民が「勝手に」絵を描くことで、自動車の減速を促すだけでなく、その活動を通じて、住民同士の交流を取り戻したりする「ストーリー



トペイント」という活動もポートランドでは盛んです。当初は違法だったこうした活動も、現在では条例化され、一定の要件を満たせば、自由にできるようになったためです。

市民参加と一言に言いますが、どのようにすれば住みやすい街づくりができるのかなど、多くを学びました。

[シティリペア | City Repair]

<https://cityrepair.org/>

[マット・ビボウ | Matt Bibeau]

NPO「シティリペア」に2005年から参加し、コアメンバーとして、特に教育イベントを担当。子供のためのパーマカルチャー教育協会の代表や、ポートランドにあるアーバンファーム「Jean's Farm」の管理運営などもしています。ニューイングランド大学で環境学を勉強し、ポートランド州立大学ではサステナビリティ教育学修士を取得しています。

# 16

## SDGsプロジェクト びわ湖環境ビジネスメッセ 2019出展

期 間 2019年10月16日-10月18日(3日間)

発 表 者 3組 (5名)

指 導 教 員 中野 桂、柴田 雅美

### ■ 活動報告

びわ湖環境ビジネスメッセは、「環境と経済の両立」を基本理念に持続可能な経済社会を目指し、環境産業の育成振興を図るため、環境負荷を低減する製品・技術・サービス等を対象とした、商談・取引と情報発信・交流の場として、滋賀県長浜市で毎年開催されているイベントです。今年の参加者は25,000名あまりの参加がありました。

滋賀大学でも社会連携研究センター(改組により、現在は社会連携センター)や環境総合研究センターなどが中心となって、これまでも協賛セミナーやブース出展を行ってきました。本年度も、産学公連携推進機構を窓口、地域連携教育推進室が中心となってブース展示をおこないました。

展示の内容は、学生がプロジェクト科目「学び・調べる SDGs」で教職員のSDGsに関わる活動取材してパネルにしたものをメインとしました。個別に行われている活動を集約した展示は、来場者にとってはもちろん、学内関係者にとっても、滋賀大学全体としてのSDGsに関する取り組みを見ることができる良い機会となりました。

また、常設の展示のほかに、SDGsに関わる様々活動をしている学生によるライブトークも開催しました。具体的には、廃食油の回収などの環境活動を行なっている学生団体の滋賀エコクラブの学生による発表、アフリカのタンザニアの子どもたちに関する支援活動を計画中の学生による発表、海外インターンシップの支援をおこなっているアイセックの学生による発表の3

つがありました。

びわ湖環境ビジネスメッセは今年度を持って一旦休止となるとのことですが、ブースには、様々な関心を持って足を止めてくださる方々も多く、滋賀県にとっても大学にとっても良い機会であったと思います。





# 17

## SDGsプロジェクト 滋賀大学サステナウィーク2019

**期 間** 2019年11月25日-11月29日(5日間)  
**主 催** 滋賀大学サステナウィーク実行委員会  
**場 所** 滋賀大学彦根キャンパス  
**指導教員** 中野 桂、柴田 雅美



### ■ 活動報告

滋賀大学では、2019年11月25日から29日までの一週間を「滋賀大学サステナウィーク2019」として、サステナビリティに関する講演会やワークショップ、展示などをおこないました。

企画は、経済学部の地域連携教育推進室のスタッフ（教員2名、事務補佐員1名）を中心として、6名程度の学生有志からなる実行委員会によって立案をしました。

実は、こうしたイベントは、Sustainability Weekとして、以前より世界各国で開催されています。日本では北海道大学がサステナビリティ・ウィークとして2007年から2017年まで毎年開催してきました。他にも立命館大学でも学生主体の実行委員会形式で2017年よりSustainable Weekを開催しています。

滋賀大学としては初めての開催とはなりませんが、これまでの地域連携教育推進室（および前身の就業力育成支援室）のこれまでの活動やネットワークが縦横に発揮され、少ないスタッフながら多彩なイベントを開催することができました。

学生企画としては、立命館大学Sustainable Week実行委員会のメンバーを招いた「SDGs表現論」、駐日タンザニア臨時大使を招いた講演会、日本教育創造機構の代表を招いた講演会などのほか、脱プラスチックに向けた展示などがありました。これらの多くは普段から地域連携教育推進室に出入りする学生によるものであり、地域連携教育推進室が培ってきた学生との協働が自然に遺憾無く発揮された形となりました。

一方、自然エネルギーによる地域再生を取り扱った

映画「おだやかな革命」の上映会は、地域で自主上映会を企画していた市民有志の方々との共催となりました。また、ネパールの女性たちによるキルトの展示会は、「国際交流の会とよなか」の協力によるものでした。バースセンター（助産施設）の設立を目指す助産師グループの方々もワークショップを開催してくれるなど、こちらも地域連携推進室のメンバーが日頃から築いてきた地域との関係から生まれてきたものでした。

実行委員会メンバー教員による企画としては、JICA 関西滋賀県国際協力推進委員、城南信用金庫顧問、羽衣国際大学教授をお招きした講演会のほか、大学におけるSDGs関連の取り組みを紹介したポスター展や大きなテントの中に薪ストーブを設置した「バイオマステント」なども実施しました。このテントは、その中で認知症に関するワークショップが開催されたり、夕方になるとフィンランド式のスチームサウナになったりして活用されました。

教育学部教員によるデザイン展も協賛イベントとして位置づけることが出来ましたが、将来的には、他学部との協力し、より包括的で全学的な取り組みにすることができれば、良いと思います。

# 18

## プラットフォーム事業 認知症をめぐる共生社会構築の ためのプロジェクト

期 間 2019年8月12日-2020年3月31日

担当教員 中野 桂



### ■ 活動報告

600万人を超えるという認知症患者やその家族・介護者の抱えている課題に対して、学生、行政、研究機関などが協働して課題解決の道を模索するプロジェクトに取り組みました。この事業は2019年度文部科学省の「彦根・長浜地域における学術文化教育基盤形成を目的とした大学・短期大学・地域連携プラットフォーム事業」の一部として、その助成を受けて実施されました。

まず、その取り組みの開始に際し、8月12日から20日にかけて、ヘルシンキで開催されたフィンランド障害研究学会への参加し、フィンランドの認知症グループホームの視察を実施しました。

9月27日は、キックオフセミナーとしてピープルデザイン研究所代表の須藤シンジ氏より川崎市や渋谷区で行なった認知症に関わるプロジェクトについてご報告をいただき、続いて、大阪大学実践薬学研究センターの仁木一順氏にVRを使った認知症患者のQOLの改善について最近の研究成果についてご報告いただきました。後半は参加者をグループに分けて、それぞれの抱えている課題やその課題についてどのようなアプローチが可能であるかについて、ディスカッションをおこないました。

11月25日には、滋賀大学サステナウィーク2019のイベントの一つとして、認知症ワークショップを開催しました。このワークショップの目的は、認知症について一般の学生にも広く知ってもらったり、認知症患者やその家族と交流することにより、課題を明らかに

することでした。

これらのイベントには、プラットフォーム連携機関から11名（5機関）、一般参加者18名などの参加がありました。

また、ほぼ毎週、水曜日に学生と地域の介護職員の方で集まり、情報交換や今後のプロジェクトの展開について検討をおこないました。



# 19

## プラットフォーム事業 不登校プロジェクト

期 間 2019年8月19日-2020年3月31日

担当教員 柴田 雅美

### ■ 活動報告

不登校状態にある中学・高校生等を対象に、大学の資源を活用したインキュベーションづくりを行うもので、2019年度文部科学省の「彦根・長浜地域における学術文化教育基盤形成を目的とした大学・短期大学・地域連携プラットフォーム事業」として本学の3つのプロジェクトのうちの1つです。

不登校や隠れ不登校が44万人に達すると報じられ社会課題の一つといわれていますが、本プロジェクトでは、大学の地域貢献としてこれらの諸課題の一助になるべく大学の資源を活用した不登校生徒等のインキュベーションづくりを目指します。

大学での不登校の児童・生徒に対応した取り組みは、東京大学の異才発掘プロジェクトや筑紫女学園大学の不登校の子どもの居場所づくりなどの事例がありますが、プラットフォーム事業を通じて本学の他に、滋賀県立大学・聖泉大学・滋賀文教短期大学への広がりも見込まれ、大学が連携して広域的に地域の子どもや若者の学び・育ちを応援する新しいモデルとなることも想定しています。

プロジェクトの具体的内容は大学生の授業の空き時間を使った不登校生徒の寄り添い支援です。活動は生徒のニーズにあわせて、地域連携教育推進室、図書館、生協・学食の利用、授業への聴講などを考えています。

このプロジェクトでは本学だけでなく、彦根市教育委員会、彦根市子ども未来部・福祉保健部、彦根市社会福祉協議会やプラットフォーム事業連携校（滋賀県立大学、聖泉大学、滋賀文教短期大学、長浜バイオ大学）との連携を取りながら進めています。

今年度は準備段階として年8月19日（月）に彦根市と近隣の不登校の実態についての研究会（勉強会）を開催し、不登校プロジェクトの説明や不登校の実情と取り組みについて情報交換を行いました。また、学校以外の学びの場の研修として、9月19日に愛知県岩倉市のデモクラティックスクールまんじゅを訪問し取り組みを学び、9月24日（火）・25日（木）には筑紫女学園大学と太宰府市教育支援センターを訪問し、不登校支援として大学施設を使った子どもの居場所活動と太宰府市の不登校支援の取り組みを学びました。

さらに、彦根市においての不登校プロジェクトの周知と学校以外の学びの場を検討する機会として、3月7日に「これからの教育 デモクラティックスクールという選択」と題して、デモクラティックスクールまんじゅの今井恭子さんを迎えて講演会を開催したり、来年度に大学での不登校の生徒支援を念頭に、3月16日から19日にデモクラティックスクールまんじゅにスタッフとして参加し、子どもとの関わり方・教室運営の実際を学びます。

成果として、彦根市の不登校の現状について知ることができましたし、参加者から各組織や団体の子ども・若者サポートの取り組み状況を知ることができました。彦根市教育委員会の考え方を知ることができたのも収穫でした。初年度は取り組みにあたってのインプットを重視しましたが、次年度では少人数でも実際に不登校の子どもたちを受け入れてみながら、受け入れ体勢の整備を考えたいです。

## IV 今年度の取組を振り返って

入江 直樹 | 特任准教授  
地域連携教育推進委員 / 就職支援室

### 1. 新江州(株)社員による講演 (7月18日)

2019年度春期の講義「キャリアデザイン論」において新江州(株)総務人事部入社10年目の社員にお話しいただきました。どのような経緯で入社したのか、長浜市で仕事をする事、生活をする事の意義、楽しさなどについてお話しくささいました。大手企業志向で就職活動をおこなっていたが、経営者の声現場にまで直ぐに伝わり、一枚岩になって動く組織に惹かれ入社したとのことでした。この講義を聞いた学生からは、企業選択は有名であるとか規模が大きいななどで判断するのではなく、やりがいや使命感で決めてもいいのでは、などの意見が寄せられました。地元で働く方からのメッセージは学生に響くと実感しました。

### 2. 中小企業研究会の開催 (12月12日)

近畿経済産業局における地域中小企業・小規模事業者の人材確保支援等事業の一環として、近畿経済産業局、一般財団法人大阪労働協会と連携して中小企業研究会を行いました。2019年度秋期の講義「キャリアデザイン論」において滋賀県下の中小企業で働くお二人の社員から、中小企業で働く面白さ、やりがいについてお話しいただきました。また近畿経済産業局の方からは日本における中小企業の役割についてお話しいただきました。学生が企業規模や知名度だけでなく、やりがい、使命感なども考慮に入れて進路選択することの重要性を伝える機会となりました。

### 3. ラグビーチーム「ワイルドパンチ」との連携 (9月25日~12月19日)

大学の企画「近江楽座」で滋賀大学体育会ラグビー部の子供とのラグビーによる連携事業に関わりました。学生が主体となり、彦根、米原などの中学生とラグビーを通してふれあい、健やかに過ごし、健康的に育まれる行事を行いました。この中学生は米原ラグビースクールの子供たちで、指導者とともにラグビーを通して強い肉体と精神を育むために頑張っています。そこにラグビー部員が協力して、毎週水曜日に本学グラウンドにて基本的フィットネスや応用プレーまで多岐にわたって練習をしました。一人でも多くの子供たちがラグビーを好きになり、健康な学生生活を送るための道標となればと思います。

今後も引き続き地域の人々との関りを通して学生が広い視野と人としての思いやりを持てるような、そんな行事、イベントを実施できればと思います。

地域連携教育推進委員会

中野 桂（取組責任者）

柴田雅美

田村あずみ

入江直樹

榎本雅之

岡本哲弥

須永知彦

瀧口和司

橋本良純

土田梨絵（事務担当）

国立大学法人 滋賀大学  
経済学部 地域連携教育推進室  
2019年度 活動報告書

令和2年3月31日発行

発行 滋賀大学経済学部  
地域連携教育推進室